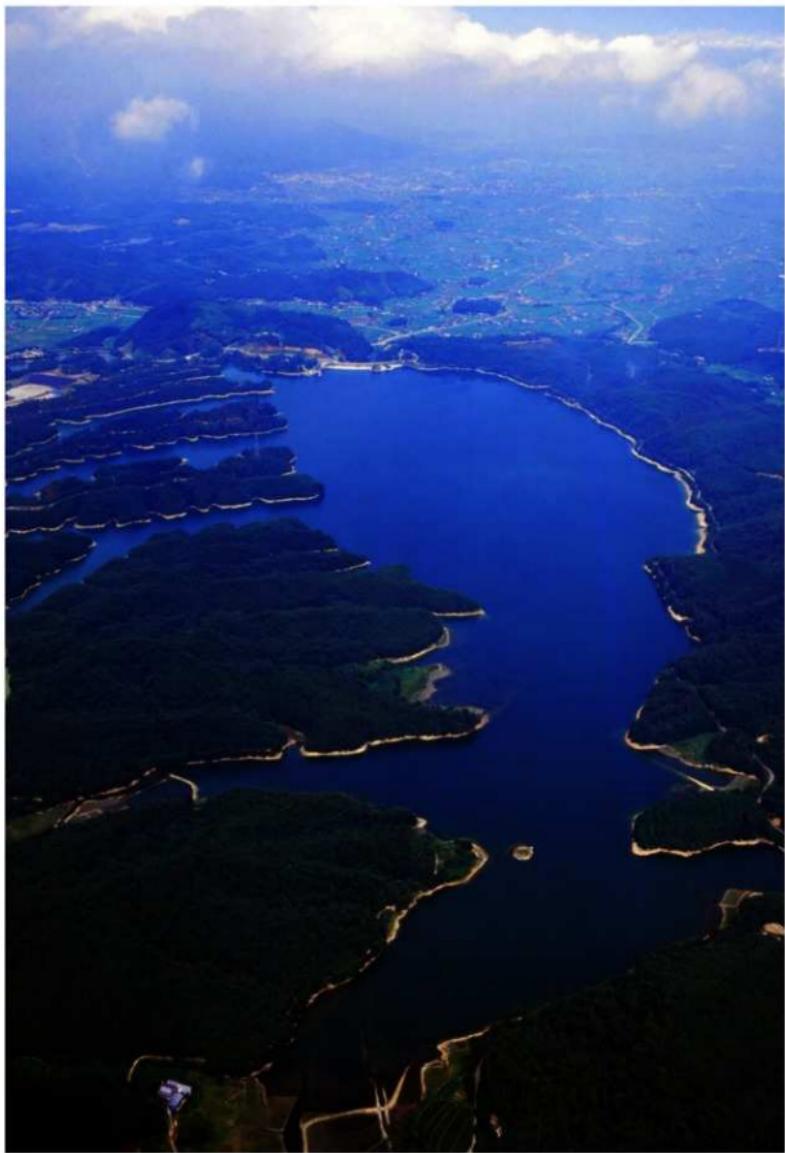


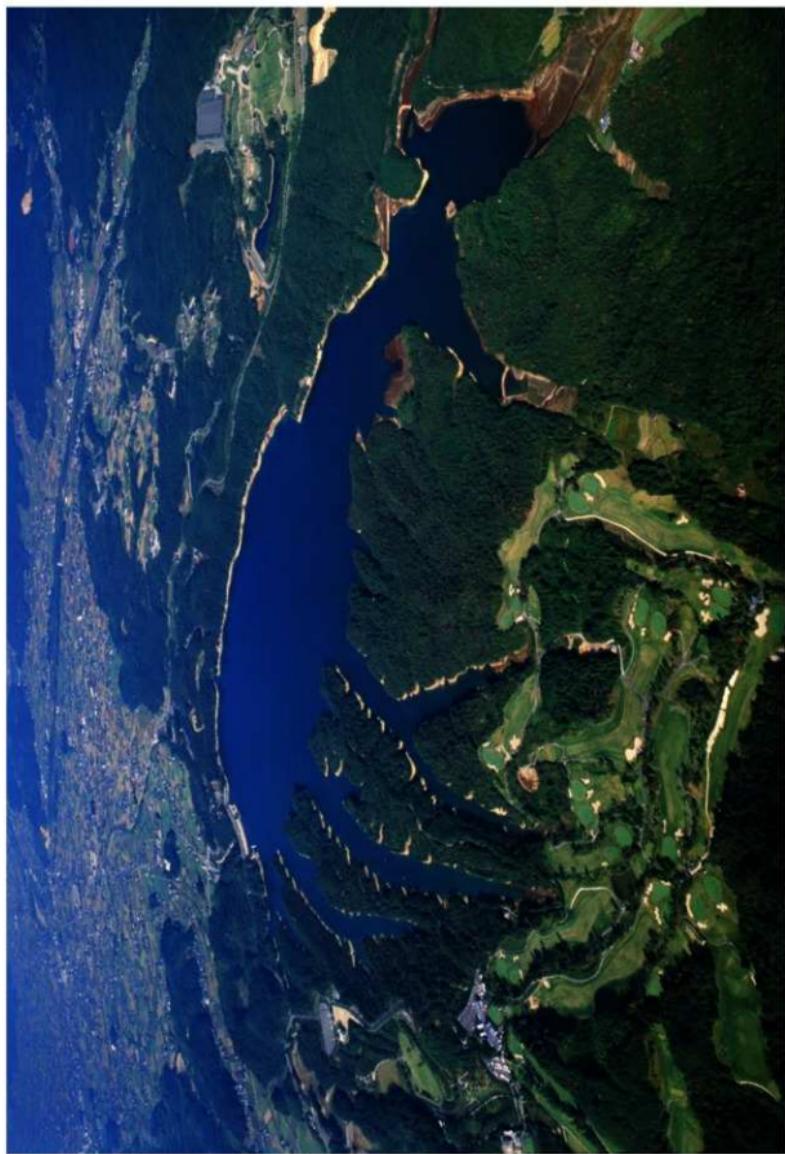
滿濃池名勝調査報告書

2019年3月

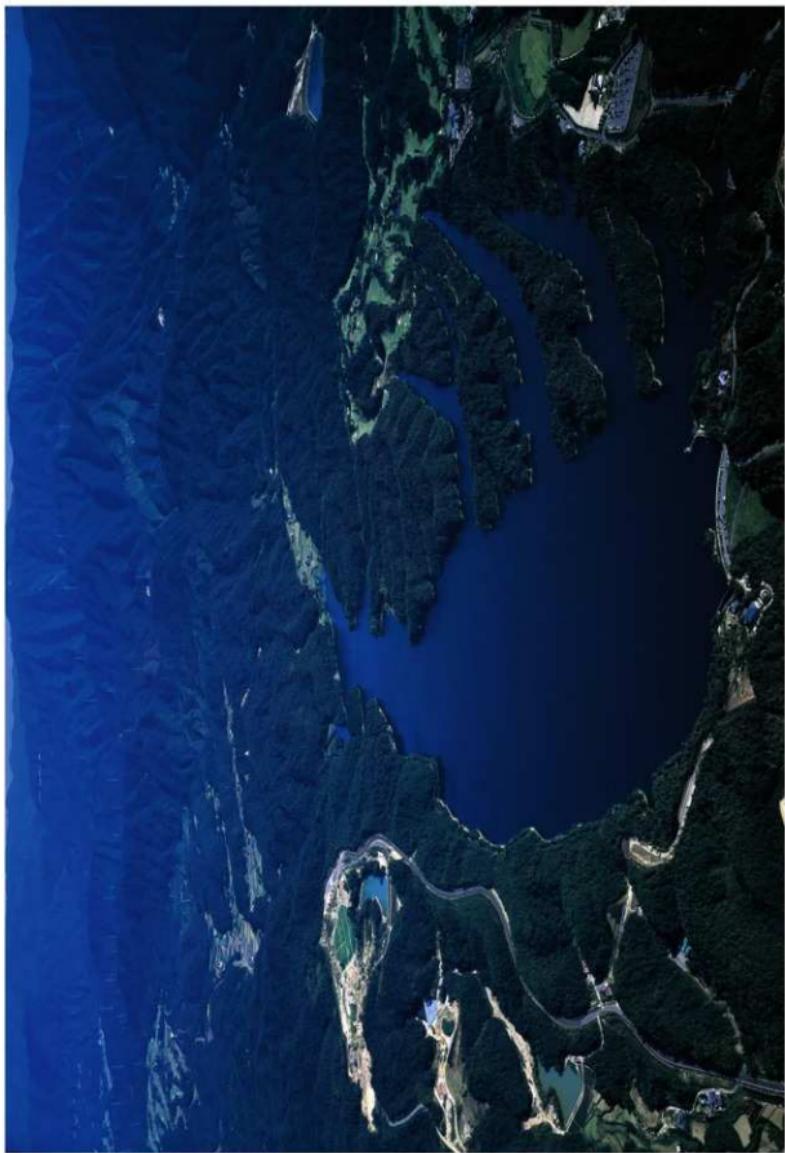
まんのう町教育委員会



満濃池 全景（南東より）



満濃池 全景（南より）



満濃池 全景（北西より）



満濃池 堤体より南東を望む（遠方に大川山）



満濃池 堤体より池奥を望む（中央に大川山）

序 文

満濃池は、香川・徳島県境の讃岐山脈から北へ延びる丘陵を開析した谷底低地の狭窄部に堤塘を築造したアーチ式アースダムのため池であり、満水面積 138.5ha、貯水容量 1,540 万 m³を誇る農業灌漑目的としては我が国最大のため池です。

堤体から南東を望むと、広大な池面の周囲をなだらかな丘陵が取り囲み、更にその背後には讃岐山脈がそびえるなど、優れた風致景観をもっています。

飛鳥時代末葉に築造され、度重なる破堤と修築を繰り返して現在に至る豊かな歴史性をもっており、中でも弘仁 12 年(821)の弘法大師空海による修築の事績は著名です。

一方で、満濃池の風致景観は、江戸後期から幕末の地誌である『金毘羅山名勝図会』や『讃岐国名勝図会』等において「山水勝地風色の名池」として取り上げられるなど、名所として知られていきました。

まんのう町教育委員会では、満濃池の文化財としての価値付けや将来にわたる保護を検討するために、平成 29 年度から平成 30 年度に国庫補助事業として満濃池の名勝調査事業を実施し、この度報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書が、名勝地としての満濃池の価値の認識や、将来への風致景観の保存に繋がることを祈念します。

最後になりましたが、本調査事業を実施するにあたり、ご協力いただきました文化庁、香川県教育委員会、各関係機関、地元関係者の皆様方に、心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

まんのう町教育委員会

教育長 三 原 一 夫

例　言

1. 本報告書は、まんのう町教育委員会が、文化庁の文化財補助金を受けて平成 29・30 年度国庫補助事業として実施した、満濃池名勝調査の報告書である。

2. 調査及び報告書の作成は、まんのう町教育委員会が実施した。

本報告書の執筆は、第 6 章に各委員より玉稿を賜り、その他の章は文末に文責を記した。特に明記されていないものは、まんのう町教育委員会によるものである。

3. 調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々のご教示、また関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

青木達司、浅野雅也、井原　縁、齋部和壽、上野　進、大北知美、角道弘文、片桐孝浩、国重　進、菅原良弘、鈴木信男、増田拓朗、田井晴明、田口慶太、田中健二、信里芳紀、野村美紀、平澤　毅、藤田昌大、松岡明子、芳澤直起、

文化庁文化財部文化財第二課、国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所、香川県農政水産部土地改良課、香川県環境森林部みどり整備課、香川県土木部河川砂防課、香川県土木部道路課、香川県教育委員会生涯学習・文化財課、香川県立ミュージアム、神野神社、神野寺、丸亀市立資料館、NPO 法人まんのう池コイネット、満濃池土地改良区、まんのう町文化財保護協会、国立公文書館、香川県立図書館、高松市歴史資料館、四国新聞社、鎌田共済会郷土博物館、志度寺、金刀比羅宮、琴平町、国土地理院、国営讃岐まんのう公園、香川県立満濃池森林公园

(敬称略、順不同)

4. 挿図の一部に、国土地理院長の承認及び助言を得て、同院所管の測量標及び測量成果を使用して得た、平成 20 年 3 月測図まんのう町 1 :2,500 地形図を縮小編集した、まんのう町全図(1 :10,000、承認番号 平 19 四公 第 4 号)を使用した。

目次

第1章 調査の経緯と経過 1

- 第1節 漢淵池の位置 1
- 第2節 調査の経緯・経過 1
- 第3節 漢淵池名勝地調査委員会の設置 5

第2章 土地利用と法規制 7

- 第1節 漢淵池周辺の土地利用と法規制 7

第3章 歴史的環境 9

- 第1節 歴史的環境 9
 - 1. 漢淵池築造の歴史的前提条件 9
 - 2. 丸亀平野における漢淵池築造以前の灌漑手法 9
 - 3. 漢淵池の灌漑手法の特性 11
- 第2節 漢淵池内の考古資料 15
 - 1. 採取遺物の概要と地点 15
 - 2. 横穴石室墓(岡の塚穴古墳・長谷古墳・華谷古墳・神野古墳) 15
 - 3. 箱型石棺墓(神野1～3号石棺) 16
 - 4. 神野1号窓 17

第4章 自然的調査 21

- 第1節 地質と地形 21
 - 1. 漢淵池及び周辺の地質の特質 21
 - 2. 漢淵池の地形 22
- 第2節 現況調査 25
 - 1. 堤体 25
 - 2. 堤体右岸 28
 - 3. 堤体左岸 29
 - 4. 南岸 31
 - 5. 北岸 32
 - 6. 奥部 33
- 第3節 植生 36
 - 1. 北岸西部 36
 - 2. 北岸中部 38
 - 3. 北岸東部 38
 - 4. 南岸西部 40
 - 5. 南岸中部 40
 - 6. 南岸東部 40

7. 放水路開削 40

8. 堤体背後の丘 40

第5章 人文的調査 43

- 第1節 古代 43
 - 1. 漢淵池築造と修築 43
 - 2. 史料にみる古代の漢淵池の認識 44
- 第2節 中世 44
 - 1. 史料にみる中世の漢淵池の様子 44
- 第3節 近世 45
 - 1. 寛永の再築 45
 - 2. 漢淵池の風景の観賞 46
- 第4節 近代 67
 - 1. 近代の漢淵池の変遷 67
 - (1) 寛永7年の決壊と明治3年の再築 67
 - (2) 第一次嵩上げ事業と赤レンガ取水塔の建設 68
 - (3) 第二次嵩上げ事業 69
 - 2. 近代の風景の概賞 69
 - 3. 名所紹介 70

第5節 現代 85

- 1. 第三次嵩上げ工事 85
- 2. 周辺の公園整備事業 87
- 3. 選定 87

第6章 特論 91

- 第1節 漢淵池の植生・植生の変遷と今後の課題 91
 - 1. 植生の変遷 91
 - (1)江戸～明治 91
 - (2)昭和後半(1960年代前半)まで 93
 - (3)1980年代後半 93
 - (4)現在(2017～2018年) 95
 - 2. 今後の植生管理の課題 95
 - (1)アカマツおよびアカマツ林の扱い 95
 - (2)花木類の扱い 97
 - (3)ヒノキ林、スギ林の扱い 97
 - (4)竹林の拡大 99

(5) 岸の浸食	99	(2) 寛永年間の再築	135
(6) 背景の検討	99	(3) 宽永7年地震による決壊と復興	144
第2節 近代化の溝瀬池改築と景観	101	おはりに	148
1. 近代化における溝瀬池の改築	101	第4節 文芸作品からみた溝瀬池の名勝的価値の形成過程	149
(1)はじめに	101	はじめに	149
(2)明治期における改革事業	101	1. スケールの広大さ	149
(3)昭和初期における改革事業	102	2. 固有の立地環境	154
(4)昭和中期における改革事業	102	3. 歴史的価値および社会的価値への認識	157
(5)溝瀬池諸元の変遷	102	4. 総括	160
2. 溝瀬池としての景観構成要素	103	第7章 総括	161
(1)溝瀬池堤体の特性	103	第1節	161
(2)日本最大級のため池としての池面の景観	103	1. 沿革	161
(3)水管網に伴って生じる景観変遷	109	2. 溝瀬池の名勝地としての構成	162
第3節 歴史資料からみた溝瀬池の景観変遷	111	3. 溝瀬池の名勝としての価値	163
はじめに	111	4. 名勝として保護を要すべき範囲	163
1. 「諭旨名勝団会」に見る溝瀬池	111	資料編	167
(1)国公立文書館所蔵「諭旨名勝団会」について	112	歴史資料一覧表	168
(2)国公立文書館所蔵「溝瀬池名勝団会」の溝瀬池保全計画について	118	引用・参考文献	173
(3)「諭旨名勝団会」に見る溝瀬池の造営・修築と景観	128	溝瀬池年表	178
①溝瀬池の修築と決済	128	航空写真	185
②溝瀬池の景観部写	129	図版	189
2. 絵画史料に見る溝瀬池の景観の変遷	131	旧図にみえる旧堤堤並びに余水社	198
(1)池内村	131		

挿図目次

第1図	溝瀬池位置図	2	第13図	堤体測量図・周辺構造物立闇図	27
第2図	まんのう町全図	3	第14図	第2番堤越冬の撮影地一覧	35
第3図	丸亀平野と溝瀬池の位置	4	第15図	溝瀬池周辺の植生の概況(2018)	37 94
第4図	溝瀬池周辺の土地利用と法規制一覧図	8	第16図	第2回自然環境保全基礎調査(植生調査) 現存植生(1982)	94
第5図	弥生時代後期から古墳時代の基幹的施設水路	10	第17図	嵩上げ工事による溝水面積の推移	104
第6図	丸亀平野の条里地割と溝瀬池の複数範囲	12	第18図	貯水位Hと溝水面積の関係	104
第7図	まんのう町指定・登録文化財	14	第19図	平均水位、最高水位、最低水位の推移	106
第8図	神野古墳・神野1・2・3号箱式石棺 遺構実測図	16	第20図	1・2 各時期の等深線図	107・108
第9図	神野1号室構断面図・完掘状況平面図	17	第21図	水位変動パターン	109
第10図	溝瀬池内遺物採集・道路位置図	19	第22図	保護を要すべき範囲	164
第11図	溝瀬池周辺地形分類図	22	第23図	保護を要すべき範囲	165
第12図	溝瀬池周辺地形分類図	23	旧図にみえる旧堤堤並びに余水社	198	

表 目 次

- 第1表 満濃池の主な歴史 6
第2表 満濃池主要採集植物一覧表 18
第3表 満濃池諸元の変遷 102
第4表 岩上方に伴う當時満水位の推移 105

資 料 目 次

- 資料1 普通寺一円保険図(普通寺御藏井寺御院) 13
資料2 日本書紀 49
資料3 萬濃池後碑文 49
資料4 今伊勢国 第二十木曾御院 第十一羅刹 天保七八年落成した跡 51
今伊勢国 第十一木曾御院 第十二羅刹御院の跡(くわいし御院跡) 51
資料5 志度寺寺銘記 当願暮当之跡記 52
資料6 耕著本色度寺寺銘記 白杖童子寺銘記 当願暮当之跡記 52
資料7 満濃池當願國 53
資料8 満濃池御普請附記 54 150
資料9 満濃池越國 天保八丁酉年 55
資料10 講岐郡那珂部分開闢圖 56
資料11 玉藻集 57
資料12 金堤羅山名勝園会 57
資料13 講岐遍遊記 59
資料14 象頭山十二景圖 二巻 十二 萬濃曲流 60
資料15 象頭山十二景圖 十二幅 十二 萬濃曲流 60
資料16 金堤羅山名勝園会 61 62 155
資料17 象頭山八景 満濃也遊鶴 61 65 63 92 151
資料18 金堤羅參詣名所園会 63 64
資料19 講岐名勝園会 63 65 92 156
資料20 象頭山參詣道紀付田ヨリ講岐邊井掛唇名勝附 66
資料21 真野池記 71
資料22 松坡長谷川鉄功碑 73
資料23 満濃池之図 74
資料24 満濃池水掛ヶ之図 75
資料25 講岐町四河郡滿濃池近御御料私領園会 76 146
資料26 講岐名勝草 満濃池八景 77
資料27 柿村書屋詩集 78
資料28 吉井勇の短歌「満濃池に遊びて」 78
資料29 講岐字真帖 79 152
資料30 香川県奈良池竣工記念絵葉書 80
資料31 満濃池弘法大師御靈除霊記念絵葉書 81 153
資料32 講岐平石河原絵葉書 82 156
資料33 講岐二百景 82
資料34 金刀比羅宮御院内及講岐名所圖繪 83
資料35 琴平急行沿岸名勝鳥瞰圖 84
資料36 新さぬき百景 88
資料37 残したく「日本の奇風異俗 100選」「満濃池のうみとせせらぎ」 89
資料38 ダム湖百選 89
資料39 地域活性化に役立つ近代化産業遺産 90
資料40 世界にかなう施設遺産 90
資料41 須原京太郎歌詞付御名勝御靈除霊ワ賞金円下冊 113
資料42 未明の御靈除霊外 佐江御靈除霊御靈除霊外 未明御靈除霊外 114
資料43 講岐名勝園会 万濃池 池宮 摂羽園 119
資料44 貴安の唐社文書 132
資料45 講岐御靈除霊 133
資料46 講岐御靈除霊 134
資料47 満濃池當願國 摂羽園 136
資料48 矢原家文書 139
資料49 国懸山に見る神内池と三谷池 141
資料50 天保羅山記 講岐羅山 摂羽園 143
資料51 満濃池ガイドマップ 153
資料52 小西嘉純 油彩「満濃池」 157

写真図版目次

- 卷頭図版1 満濃池 全景(南東より)
卷頭図版2 満濃池 全景(南より)
卷頭図版3 満濃池 全景(北西より)
卷頭図版4 満濃池 堤体より南東を望む(遠方に大川山)
　　満濃池 堤体より池奥を望む(中央に大川山)
写真1 堤体より池面を望む 西より 25
写真2 堤体 北より 26
写真3 堤体 東より 26
写真4 堤体 西より 26
写真5 ほたる見公園 歩道 南西より 26
写真6 満濃池橋門 西より 26
写真7 満濃池余水放流工 南より 26
写真8 堤体上北半 南より 29
写真9 余水吐 東より 29
写真10 神野神社 東より 29
写真11 かりん会館 東より 29
写真12 取水塔 西より 30
写真13 堤体左岸 北西より 30
写真14 神野寺 東より 30
写真15 写し塗場 南より 30

- 写真 16 神野寺弘法大師像 北より 30
写真 17 満濃池南岸 北西より 31
写真 18 香川県満濃池森林公園 北より 31
写真 19 香川県満濃池森林公園 桜の森 南より 31
写真 20 満濃池北岸 東より 32
写真 21 満濃池北岸 歩行者専用道 東より 33
写真 22 竜王社 東上り 33
写真 23 国営讃岐まんのう公園展望デッキ 東より 33
写真 24 満濃池北岸 歩行者専用道 東より 33
写真 25 満濃池奥部 東より 34
写真 26 中谷川河口付近 東より 34
写真 27 五毛集落から見る満濃池 東より 34
写真 28 金倉川(満濃池取水口) 西より 34
写真 29 五毛大橋 北より 34
写真 30 北岸全景 36
写真 31 北岸西部 38
写真 32 北岸西部 38
写真 33 北岸中部 38
写真 34 北岸西部～中部 38
写真 35 池の東部 39
写真 36 北岸東部 39
写真 37 北岸東部 39
写真 38 北岸東部(対岸から見る) 39
写真 39 北岸東部 39
写真 40 南岸西部 41
写真 41 南岸中部 41
写真 42 南岸中部 41
写真 43 南岸中部 41
写真 44 南岸東部(対岸から見る) 41
写真 45 南岸東部 42
写真 46 南岸東部 42
写真 47 堤体背後 42
写真 48 放水路両岸 42
写真 49 堤体背後の丘 42
写真 50 貞野池記 67
写真 51 松陵長谷川鈴功德之碑 67
写真 52 赤レンガ取水塔 68
写真 53 赤レンガ取水塔工事とそれに携わる人々 68
写真 54 大正3年以前の初ゆる抜き 68 153
写真 55 満濃池本堤 85
写真 56 第三次嵩上げ前の満濃池 北より 85
写真 57 第三次嵩上げ工事の様子 85
写真 58 第三次嵩上げ工事の様子 85
写真 59 第三次嵩上げ直後のゆる抜き 86
写真 60 赤レンガ取水塔撤去の様子 86
写真 61 新取水塔工事の様子 86
写真 62 県営満濃用水改良竣工記念碑 86
写真 63 天皇陛下幸記念碑 86
写真 64 香川県満濃池公園 87
写真 65 国営讃岐まんのう公園 87
写真 66 ゆる抜きを見物する観光客 87
写真 67 横門より溢れ出る水 87
写真 68 北岸西部 96
写真 69 北岸中部 96
写真 70 北岸中部 96
写真 71 北岸東部 96
写真 72 北岸東部 96
写真 73 写真62(左)の構内 96
写真 74 南岸中部、岬の遊歩道沿い 98
写真 75 南岸中部、岬の遊歩道沿い 98
写真 76 南岸東部、岸辺の遊歩道沿い 98
写真 77 南岸東部 98
写真 78 堤体背後の丘 98
写真 79 北岸東部 98
写真 80 アーチ形の堤体 103
写真 81 謙翠墳岩 110
写真 82 謙翠庵別荘の様子 110
写真 83 放水工の水頭床 110
写真 84 余水放流の様子 110
写真 85 昭和5年(1930)ゆる抜きの賛美 153
写真 86 ゆる抜きを見物する人々 159
航空写真 満濃池 昭和22年(1947)撮影 185
航空写真 満濃池 昭和40年(1965)撮影 186
航空写真 満濃池 昭和57年(1982)撮影 187
航空写真 満濃池 平成21年撮影 188
図版 1 満濃池全貌(南より) 189
　　満濃池全景(北西より) 189
図版 2 満濃池 堤体から南東を望む(ドローン撮影) 190
　　満濃池 堤体全景(南東より、ドローン撮影) 190
図版 3 満濃池 入り組む南岸の地形(ドローン撮影) 191
　　満濃池 直線的な北岸の地形(ドローン撮影) 191
図版 4 満濃池 後背より堤体を望む(ドローン撮影) 192
　　満濃池 余水土より南東を望む(遠方に大川山) 192
図版 5 満濃池 北岸より池面を望む(遠方に象鼻山) 193
　　満濃池 大川山より見る満濃池(遠方に象鼻山) 193
図版 6 満濃池 桜と春霞(遠方に大川山) 194
　　満濃池 ゆる抜きの風景 194
図版 7 満濃池 秋の夕暮れ(遠方に象鼻山) 195
　　満濃池 池面と紅葉する木々 195
図版 8 満濃池 朝靄(けの)満濃池 196
　　満濃池 冬の圓錐彫岩 196
図版 9 満濃池 6月、満水時の余水土 197
　　満濃池 2月、貯水量低下時の取水塔 197

第1章 調査の経緯と経過

第1節 満濃池の位置

まんのう町は、香川県南西部に位置し、人口 18,834 人(平成 30 年 4 月 1 日時点)、町域面積 194.33km² の自治体であり、平成 18 年 3 月 20 日に香川県仲多度郡の 3 町(満濃町、仲南町、琴南町)が合併して誕生した。町域の南側には標高 1,000m を超える竜王山(1059.9m)、大川山(1042.9 m)を主峰とする讃岐山脈が連なり、その麓を県下で唯一の一級河川である土器川が瀬戸内海へ向かって北流する。町域の中央には、町名の由来となった満濃池がある。

満濃池は、土器川と財田川に挟まれた標高 200~250m の丘陵状台地のほぼ中央部に立地する。主水源である金倉川が平野部へ流れ出る峡谷をアーチ式の土堰堤で堰き止め、谷部の広大な範囲に約 1,540 万 m³ の水を貯えており、農業用のため池としては貯水容量国内第一の規模を誇る。

満濃池の受益面積は、丸亀市、善通寺市、多度津町、琴平町、まんのう町の 2 市 3 町からなる 2,638ha(平成 29 年度)を測るもので、香川県域耕地面積 30,800ha(平成 28 年度)の約 1 割に匹敵するものである。

第2節 調査の経緯・経過

満濃池は「萬濃池後碑文」によると大宝年間(701~704)に讃岐の国守道守朝臣により築かれたとされる。以来、度重なる決壩と弘法大師空海(平安時代)や西嶋八兵衛(江戸時代)、長谷川佐太郎(明治時代)らによる修築を繰り返し現在に至っている。

香川県は、温暖・小雨で日照時間が日本一長い気候条件や、讃岐山脈から派生する主要河川の河川勾配が急傾斜であるという地形的条件の制約により、河川からの恒常的な取水が困難となることから、古代よりため池等の灌漑施設を構築し対処してきたという歴史がある。

こうした満濃池の歴史性や灌漑史に関わる侧面が広く知られる一方で、広大な池面と周辺の山容が一体となった風致景観は、江戸時代後期から幕末にかけての地誌等において名所として盛んに取り上げられ、詩歌の対象になるなど、名勝地としての性格をもっていたことが知られる。

また、現在においても、例年 6 月中旬に実施されるゆる抜きは、香川の初夏の風物詩として多くの見学者が訪れる。広大な池面に写る周囲の丘陵や山容は、新緑や紅葉など四季とともに変化をみせ、県内外の来訪者を魅了している。

まんのう町教育委員会では、このような満濃池の豊かな歴史性に裏付けられた優れた風致景観を将来へ向けて保存・活用していくために、名勝調査を実施し文化財として価値付けをおこなうことを決定した。

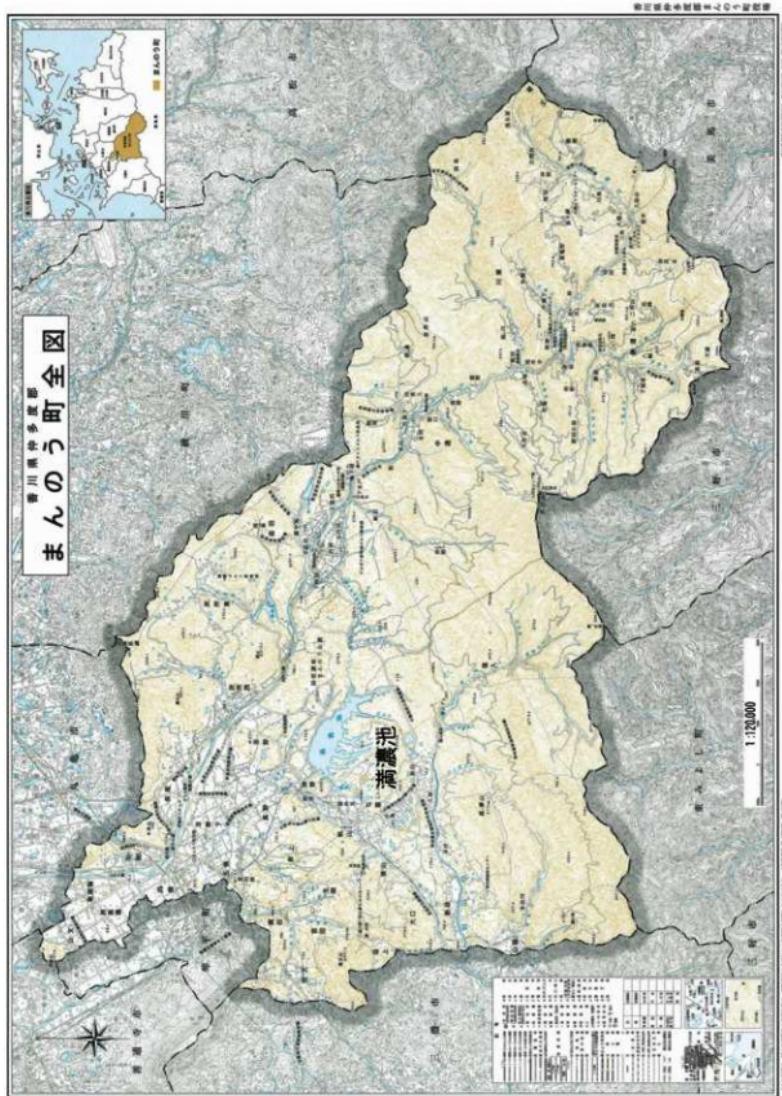
調査は国庫補助事業を活用して平成 29 年度から平成 30 年度の 2 か年において実施した。調査の主な内容は、風致景観、植生の現況や地形・地質等の自然的調査と、歴史的由緒や文芸作品等

の人文的調査を実施することで名勝地としての価値付けを行うこと目的とした。

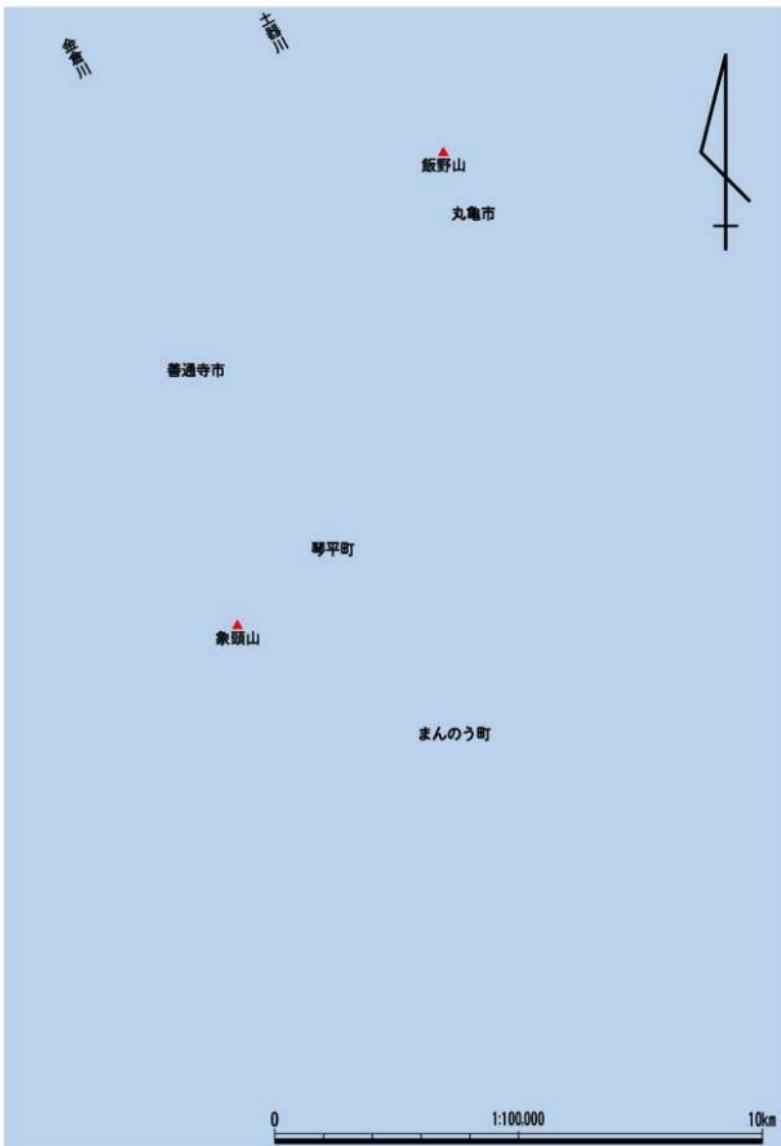
また、現況調査には、堤体部分を中心とした測量や空中写真撮影委託を行い、保護を要すべき範囲を検討する資料を得た。



第1図 満濃池位置図



第2図 まんのう町全図



第3図 丸龜平野と満濃池の位置

国土地理院地形図5万分の1丸龜・池田

第3節 満濃池名勝地調査委員会の設置

まんのう町は、満濃池の調査成果及び価値づけの検討を行うため、平成29年10月6日に「満濃池名勝地調査委員会」を設置した。

満濃池名勝地調査委員会は、平成29・30年度の2か年において4回開催し、満濃池名勝調査事業に関する協議・検討を行った。

本委員会の経過は下記の通り。

- ・第1回委員会

日時：平成29年10月6日（金）

内容：委員委嘱、会長選出、調査に至る経緯経過の説明、既存調査成果の検討

調査方法およびスケジュールの協議、報告書章立と原稿執筆依頼

- ・第2回委員会

日時：平成30年3月5日（月）

内容：満濃池の名勝調査基本方針、調査成果の検討

- ・第3回委員会

日時：平成30年7月31日（火）

内容：調査成果及び保護を要すべき範囲の検討

- ・第4回委員会

日時：平成30年12月7日（金）

内容：調査報告書総括内容の検討

満濃池名勝調査組織は以下の通りである。

調査指導 満濃池名勝地調査委員会

会長 増田拓朗（造園学、緑化工学 香川大学名誉教授）

委員 田中健二（日本中世史 香川大学名誉教授）

井原 縁（造園学、環境デザイン学 奈良県立大学准教授）

角道弘文（農業土木学、農村計画学 香川大学創造工学部教授）

調査協力 鈴木信男（まんのう町文化財保護審議会会長）

齋部和壽（まんのう池コインネット代表：平成29年度）

藤田昌大（まんのう池コインネット代表：平成30年度）

菅原良弘（まんのう町文化財保護協会会长）

調査担当 まんのう町教育委員会 生涯学習課 文化財室

総括 松下信重（まんのう町教育委員会生涯学習課課長）

調査担当 加納裕之（まんのう町教育委員会生涯学習課文化財室）

中村文枝（まんのう町教育委員会生涯学習課文化財室）

オブザーバー

文化庁文化財部文化財第二課名勝部門

香川県教育委員会生涯学習・文化財課

西暦	和暦	概要
-	-	大宝年間(701-704)、讃岐国守道守朝臣、万農池を築く。(萬濃池後碑文)
820	弘仁11	讃岐国守清原夏野、朝廷に万農池修築を伺い、築池使路真人浜継が派遣され修築に着手。
821	弘仁12	5月、復旧難航により、築池別当として空海が派遣される。その後、7月からわざか2か月余りで再築される。
851	仁寿1	秋、大水により万農池を始め讃岐国内の池がすべて決壊する。
852	仁寿2	閏8月、讃岐国守弘宗王が万農池の復旧を開始し、翌年3月竣工。
1022	治安2	満濃池、再築。
1184	元暦1	5月、満濃池、堤防決壊。この後、約450年間、池は復旧されず放置され荒廃。池の内に集落が発生し、「池内村」と呼ばれる。
1628	寛永5	西輪八兵衛が満濃池再築に着手。
1631	寛永8	満濃池、再築。
1849	嘉永2	長谷川喜平次が満濃池の木製底樋前半部を石製底樋に改修。
1853	嘉永6	長谷川喜平次が満濃池の木製底樋後半部を石製底樋に改修。
1854	嘉永7	6月の伊賀上野地震の影響で、7月5~9日、満濃池の樋外の石垣から漏水。8日には矢倉堅樋が崩れ、9日の九つ時に決壊。満濃池は以降16年間廃池。
1866	慶応2	洪水のため満濃池の堤防が決壊して金倉川沿岸の家屋が多く流失し青田赤土となる。長谷川佐太郎、和泉虎太郎らが満濃池復旧に奔走する。
1869	明治2	高松藩執政松崎清右衛門、長谷川佐太郎と満濃池視察。8月、満濃池、岩盤の掘削によって底樋とする工事に、軒原庄蔵を起用。満濃池の復旧工事に着手。9月、岩盤の削工事に着手。
1870	明治3	3月、石穴底樋貫通。6月、満濃池堤防復旧。7月、満濃池修築完了。
1879	明治12	満濃池水利土工会が組織される。
1893	明治26	5月23日、満濃池普通水利組合設立。
1905	明治38	2月、満濃池第一次嵩上げ事業に着手。
1906	明治39	10月、満濃池第一次嵩上げ事業が完了。
1914	大正3	9月、満濃池の赤レンガ取水塔が完成。
1922	大正11	3月、官有地満濃池が普通水利組合に無償譲与となる。
1927	昭和2	満濃池第二次嵩上げ事業に着手。堤高1.52m増、余水吐改築及び用水幹線1,220m延長の改修を行ひ、財田川からの承水隧道400m延長の新設工事に着手。
1930	昭和5	満濃池第二次嵩上げ事業が完了。
1940	昭和15	満濃池第三次嵩上げ工事及び天川導水路工事を県営事業として開始。
1942	昭和17	満濃池の堤体改築、堤高6mの嵩上げに着手。
1951	昭和26	満濃池普通水利組合を満濃池土地改良区に組織変更。
1953	昭和28	県営金倉川沿岸用水改良事業により、幹線水路の整備実施。
1958	昭和33	満濃池第三次嵩上げ工事が完了。
2000	平成12	2月、満濃池樋門が国の登録有形文化財となる。

第1表 満濃池の主な歴史

第2章 土地利用と法規制

第1節 満濃池周辺の土地利用と法規制

満濃池周辺は古来より現在に至るまでさまざまな土地利用が行われてきた地域であり、都市計画法、文化財保護法、都市公園法、香川県森林公園条例、河川法、道路法、土砂災害防止法、森林法等の各種の法規制等により景観や環境の保全が行われている。

都市計画法による都市計画区域

満濃池北岸は都市計画法(昭和43年6月15日法律第100号)第5条に基づき、香川県が指定する都市計画区域に含まれる。用途地域は未指定である。

文化財保護法による周知の埋蔵文化財包蔵地

文化財保護法(昭和25年5月30日法律第214号)93条により周知の埋蔵文化財包蔵地として、14箇所が香川県遺跡台帳及びまんのう町遺跡台帳に登載され、周知されている。

都市公園法並びに香川県森林公園条例による公園区域

満濃池周辺には、国営讃岐まんのう公園、香川県満濃池森林公園がある。

国営讃岐まんのう公園は都道府県を超えた広域の観点から設置された「イ号国営公園」で350haの公園面積を有する。平成10年に第1期開園、平成25年に全面開園した。

香川県満濃池森林公園は満濃池南西の丘陵地に位置し、満濃池南西岸の半島が含まれる。昭和63年に開園した。

河川法に基づく河川区域

満濃池は二級河川金倉川を堰き止めて作られたため池であるため、満濃池の水面を含む金倉川全域は河川法(昭和39年7月10日法律第167号)第9条第2項により、香川県が管理する河川区域に含まれる。

道路法に基づく道路区域

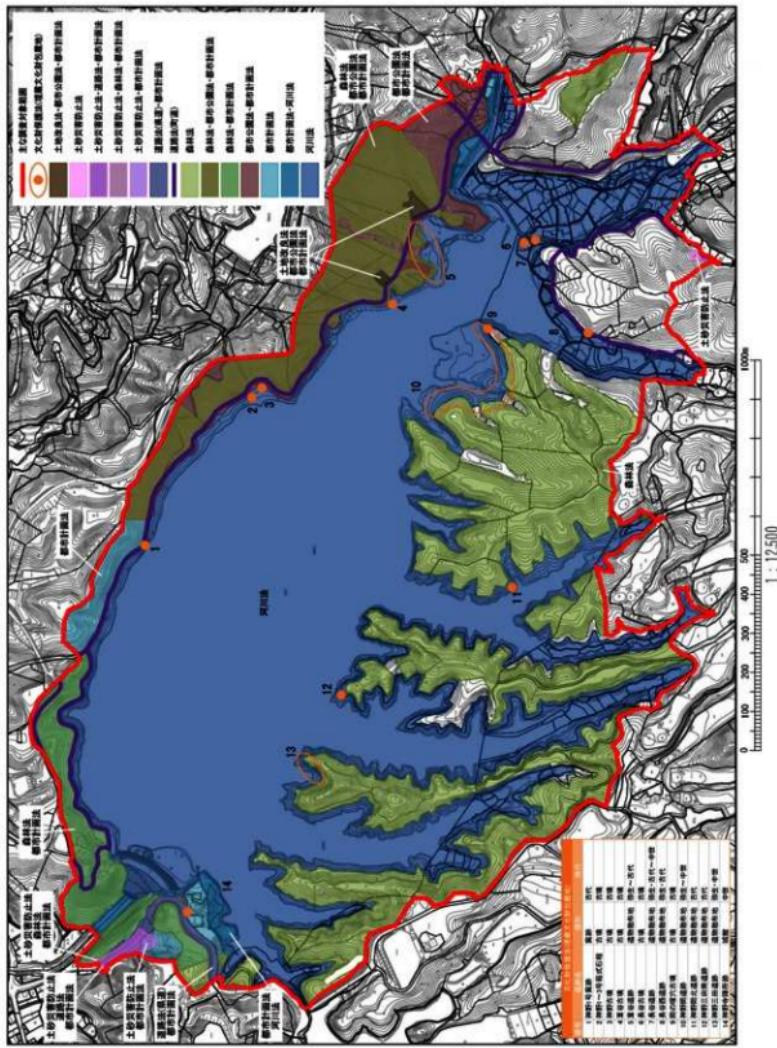
満濃池周辺には県道200号まんのう普通寺線、町道三田線、町道かりん線、町道五毛線、町道桶樋五毛線、町道長谷線がある。

土砂災害防止法に基づく土砂災害警戒区域

満濃池南東の五毛地区および堤体の北西付近には、土砂災害警戒区域がある。

森林法に基づく保安林区域

満濃池周辺は森林法(昭和26年6月26日法律第249号)第25条に基づく保安林として「土砂流出防備保安林」として指定、香川県満濃池森林公園内においては「保険保安林」と一部重複している。



第4図 満濃池周辺の土地利用と法規制一覧図

第3章 歴史的環境

第1節 歴史的環境

1. 満濃池築造の歴史的的前提条件

満濃池は、香川県の西部の仲多度郡まんのう町に所在するため池である。現状では貯水容量1,540万m³、満水面積138.5haを測り、丸亀平野と呼ばれる沖積平野の最南端部の位置から、同平野の約西半分にあたる4,537haの灌漑範囲をもつ。『続日本紀』によれば、讃岐国は文武天皇元年(697)から延暦10年(791)までの間に17回の飢饉の記事がみられる。これは、降雨が少ないという気象条件の他に、大河川がなく平地の大部分が河川勾配の急な扇状地性の沖積平野から構成されていることによる。背後の讃岐山脈への降雨は、扇状地性の平野の地下の疊層へと浸透するか、河川を流下したとしても早期に瀬戸内海へ流入してしまうという地形条件が影響している。

満濃池が築造された古代は、条里地割に基づく面的な耕地開発が進められ、恒常的な流量が少ない自然河川利用以外の水源の確保が必要とされた。条里地割に伴う水路は、丸亀平野の多くの地点において、発掘調査等により地下遺構として確認されている(金田1988、森下1997)。満濃池のような広大なため池が必要とされた歴史的背景を考えるために、一先ずは満濃池の灌漑範囲である丸亀平野の耕地開発史の状況を整理しておく必要がある。ここでは、満濃池築造に至る歴史的前提として、丸亀平野における耕地開発の推移を、灌漑水路網の特性を踏まえて概観する。

2. 丸亀平野における満濃池築造以前の灌漑手法

弥生時代前期の水田稲作の本格的な開始とともに、讃岐地域においても、灌漑水路が一斉に出現在する。それらの中には、溝の上辺幅が2mを超える「大溝」や「基幹的灌漑水路」と呼称される主要な灌漑水路が含まれ、これに複数の分水路を組み合わせることで水田への灌漑網を形成していた(大久保1995、信里2008)。取水は河川であったことが推定されるが、発掘調査で確認した水路延長距離や微地形からみて、灌漑範囲は微高地を中心とした約0.5~1km四方の単位が基本となっていたことが想定され【第5図】、広範囲における灌漑網の存在は想定し難い(大久保1995、信里2008)。

続く古墳時代においても、このような状況に変化はみられない。弥生時代後期に開削された基幹的灌漑水路の多くは古墳時代を通じて機能・維持され、これらの多くは古墳時代後期の6世紀末葉から7世紀前葉に埋没・放棄される(信里2008)。古墳時代における集落動向に不明な点が多く残るが、弥生時代に成立した灌漑網を踏襲していると考えられる。古代7世紀末葉にはため池が出現する。川津一ノ又遺跡(坂出市)では7世紀後葉に築造され8世紀にかけて維持されるため池が検出されている(香川県教委1998、木下2009)。推定池敷は約3ha、復元される堤高は約1mで上流側の大東川を取水源とし、複数の灌漑水路で各水田へ導水されたと考えられる。また、本



第5図 弥生時代後期から古墳時代の基幹的灌漑水路（川津遺跡群 信里芳紀2008）

時期は、条里地割に基づく水路網の整備が始まった段階に相当するが、堤高や池敷の面積から想定して、ため池築造により灌漑域が格段と広がった様子はうかがえない。前代までの河川からの取水に加えて、途中に貯水場を設けることで安定した利水環境を整えることに目的があったと考えられ、灌漑域は後の一つの郷を超えるものではなかったと考えられる。

弥生時代前期に始まる河川取水と複数の灌漑水路による灌漑システムは古墳時代に継続・踏襲され、7世紀には、水路途中に小規模なため池を付加し利水環境の安定化が図られたと考えられる。しかし、後の郡全体を射程に入れたような広域における灌漑手法及び思想の出現を読み取ることはできない。

3. 満濃池の灌漑手法の特性

現状の史資料で満濃池の正確な築造時期を把握することは困難であるが、8世紀までには築造されていた可能性が高い。ここでは、近世以降の灌漑範囲から満濃池の築造時期を推測する。

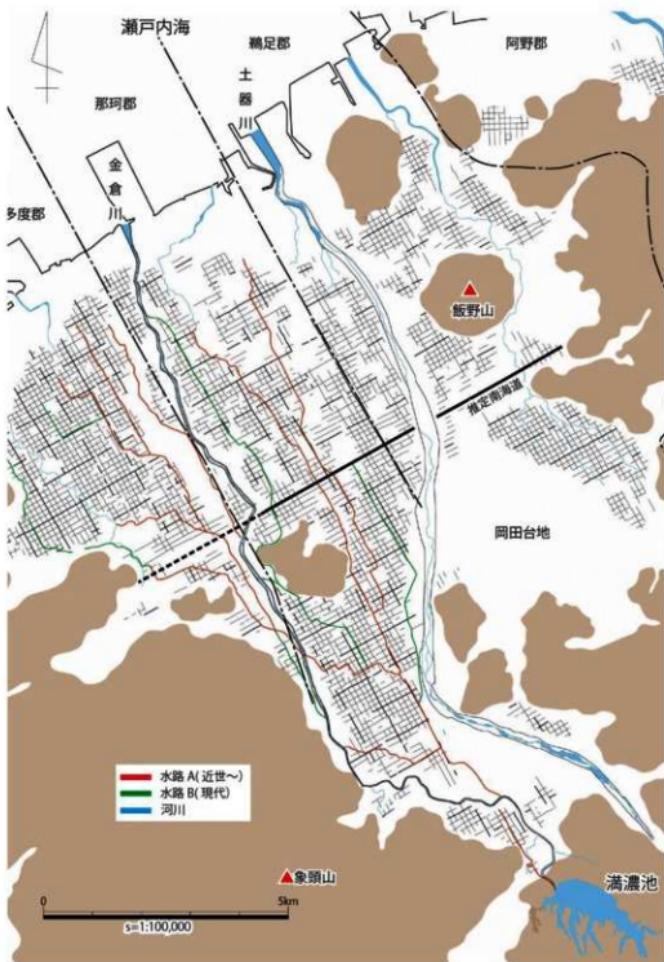
満濃池の水利慣行を示した最も遡る史料として寛永18年(1641)の「満濃池水懸り申候村高之帳」がある。同史料は、仲郡(那珂21村)・宇多郡(鶴足8村)・多度郡(17村)の各大庄屋が村高や満濃池の水掛かり等の課役を規定したもので、各灌漑受益の村の分布は現在のそれとほぼ同じ広がりをもっている。江戸中期の「讃州那珂郡分間画図」【資料10】や明治3年(1870)の「満濃池水掛村々之図」【資料21】では、満濃池からの幹線水路の敷設状況をうかがい知ることができる。これらの幹線水路は「満濃池水懸り申候村高之帳」に示された各灌漑受益の村々を網羅し、多くの箇所が直線的に描かれるなどの特徴がみられる。

これらの近世段階の幹線水路の多くは、近代以降も数回の改修工事を経ながらも現在まで踏襲されていることが知られている。【第6図】には現在の幹線水路の敷設状況を丸亀平野の条里地割に重ねて図示した。これらの幹線水路は「讃州那珂郡分間画図」や「満濃池水掛村々之図」における直線的な描写によく符合している。近代、現代に新設されたものを除いて、現在の灌漑水路網の多くは近世段階のものを踏襲していると考えられるし、条理地割に合致していることから、古代まで逆及することを強く否定できない。

幹線水路は、直接的な灌漑域となる真野郷を除き、先ず金倉川の大横井堰で取水され、同河川右岸側の那珂郡域を北流する(現丸亀幹線)。また、一部の幹線水路(現多度水路)は、再び金倉川に落水した後、善通寺市の金蔵寺堰で再び取水され、左岸側の多度郡域へ流下する。また、近世にはこれら水路網の途中の微高地上に「皿池」(金田1985)と呼ばれる貯留用のため池の築造が進み、安定的な灌漑網が形成された。

これらの近世の満濃池の灌漑水路網の特性は、次のようにまとめることができる。扇状地扇頂に主要河川である金倉川を堰き止めて水源の満濃池を築造したのち、同河川を幹線水路として扇状地扇央から扇端部にかけての広大な灌漑網を形成する。すなわち、金倉川の治水を前提として灌漑システムが構想されていることになる。

問題はこの構想が古代まで遡るのか否かであろう。改めて近世から現在の幹線水路が基本的に



第6図 丸亀平野の条里地割と満濃池の灌漑範囲

条里地割に合致した敷設状況を示しているのは示唆的であると考える。

中世における丸亀平野の灌漑システムを示す史料として徳治2年(1307)の「善通寺一円保差図(善通寺伽藍并寺領絵図)」『香川県史 第2巻 中世』がある【資料1】。善通寺伽藍を中心に寺領



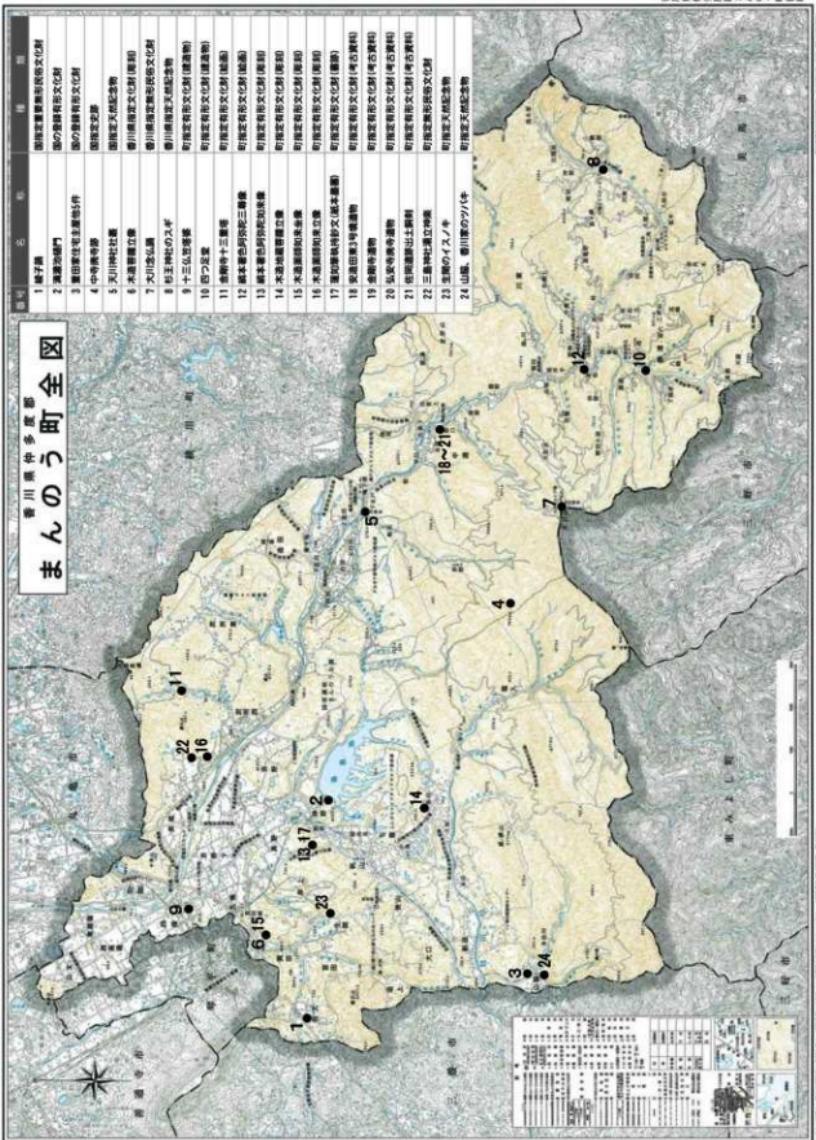
資料1 善通寺一円保差図（善通寺伽藍并寺領絵図）〔徳治2年（1307）〕

が描かれているが、水掛かりは谷池（現大池）と2基の出水を水源として条理方格に沿って水路がみられるものであり、一定地域内で完結した灌漑網である印象を受ける。寺領の一円化が完了した善通寺領ですらこのような灌漑範囲にとどまるのであって、個別的な土地所有が行われる中世にあっては、更に広域に及ぶ灌漑システムの構築は困難であったと考えられる。

このような中世における状況をみると、満濃池の河川の治水を中心とした広域灌漑網の成立時期は、条里地割に基づく広域における耕地開発が進められた古代か、土地支配の統一化が再び図られる近世のどちらかを想定せざるを得ない。【第6図】に示す近世以降の幹線水路が条里地割に合致する状況や、満濃池と同様の構築方法を探るアースダム型式ため池である狹山池の築造時期が7世紀初頭に推定されていることからも、満濃池の築造時期や灌漑網の成立時期が「萬濃池後碑文」（寛仁4年（1020））が示す大宝年間（701 - 704）に遡ると考えられるのである。（信里芳紀）

参考文献

- 大久保徹也 1995 「第5章第10節 基幹的灌漑水路と灌漑単位」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会ほか
- 金田章裕 1985 『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂
- 金田章裕 1988 「第六章 条里と村落生活」『香川県史 第一巻 原始・古代』香川県
- 木下晴一 2009 「坂出市川津町の古代のため池跡」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要V』香川県埋蔵文化財センター
- 信里芳紀 2008 「大溝の検討—弥生時代の灌漑水路の位置付けー」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要IV』香川県埋蔵文化財センター
- 森下英治 1997 「丸龜平野条里型地割の考古学的検討」『研究紀要V 特集 7世紀の讃岐』財團法人香川県埋蔵文化財調査センター



第7図 まんのう町指定・登録文化財

香川県 1989『香川県史 2 中世』

香川県 1987『香川県史 10 近世史料II』

香川県県教育委員会ほか 1998『四国横断自動車道建設に伴う発掘調査報告第33冊 川津一ノ又遺跡II』

第2節 満濃池内の考古資料

満濃池内には、土器等の考古資料が散布し、須恵器窯跡や横穴墓等の古墳が所在することは知られていた(満濃町 1975、松本敏三 1983 ほか)。これらは、満濃池の築造以前や中世の荒廃期の資料を含んでいると考えられる。まんのう町教育委員会は、このような考古資料から満濃池の築造やその後の変遷等を把握する資料を得ることを目的に、平成18・19年度に池岸を中心とした全域において遺物採取を中心とした分布調査を実施し、浸食により自然崩壊のおそれがある神野1～3号石棺墓等の確認調査を実施した。その成果については既に報告済であるが、ここでは概略について再録しておく(まんのう町教委 2008)。

1. 採取遺物の概要と地点

表採遺物は弥生土器から中世土師質土器に及ぶ。採取地点は【第10図】に示すとおりである。弥生土器は後期初頭から前葉の資料が目立つ。打製石庖丁や柱状片刃石斧、打製石鎌等もあり、一般的な弥生集落で出土する道具類が揃う。弥生時代には谷の開析が進み、集落形成が可能な一定程度の平坦地が形成されていたことを示す遺物である。

古代の遺物では、7世紀代とみられる須恵器罐、8世紀前半とみられる蓋杯【第10図57～65】があり、9世紀末～10世紀前葉では杯がみられる。8世紀前半の資料【第10図57～65】は、地点⑤にまとまって採取され、同地点では池岸の浸食を受けた断面に炭化物層を確認していることから、後述する神野1号窯と同様の8世紀前半代の窯体が存在する可能性がある。しかし、これらは想定される古代の満濃池の池敷から外れた位置に存在していることから、これをもって満濃池の築造時期を推定することはできない。

中世では、地点②において11世紀代とみられる土師質土器【第10図16～25.27】をまとめて採取しており、14世紀代とみられる東播系須恵器捏鉢や15～16世紀代とみられる土師質土器足釜などの中世後半期の資料も散見される。後者は、古代末の破堤後、池敷が耕地化していたことを示す資料と考えられる。

2. 横穴石室墓（岡の塚穴古墳・長谷古墳・葦谷古墳・神野古墳）

満濃池尻附近の五毛地区には、横穴石室をもつ3基の古墳がみられる。この付近は昭和20～30年代の第三次嵩上げによって水没した地区に相当する。

岡の塚穴古墳は、直径約10mの高まりとみられる範囲に石室材とみられる花崗岩が散乱しており、7世紀中葉とみられる須恵器蓋杯【第10図69.70】、須恵器甕【第10図71】を採取した。満水時には水面下となる。



第8図 神野古墳・神野1・2・3号箱式石棺 遺構実測図 (1:50)

長谷古墳は現状で直径10m以下のマウンドが確認できるが、石室石材や須恵器等は確認されていない。丘陵先端部の立地等から、岡の塚古墳と同様の7世紀中葉頃の横穴石室をもつ古墳であると推定しておきたい。

葦谷古墳については、池敷北岸に位置するが、常時水面下にあり、その存在を視認することはできない。『満濃町史(満濃町 1975)』及び『新修満濃町誌(満濃町 2005)』は、石室石材や須恵器片が確認されたと記述する。

神野古墳は、池敷北岸の葦谷古墳の西側に位置する横穴石室墳であり、満水時には水没して視認できない。現状で、玄室奥壁から羨道の片壁石材の基底が延長7m程残存している。現況から推定して、北西方向に開口する玄室幅1.5m程の無袖横穴式石室を考えられる。出土遺物に須恵器甕片がみられるが、石室形態からみて7世紀中葉頃の構築時期が想定できる。

3. 箱形石棺墓（神野1～3号石棺）

満濃池北岸の神野古墳の北西側上方において3基の箱形石棺を確認し、神野1～3号石棺と呼称する。3基検出位置は現在の満水位より下位であり、池水位変動に伴う浸食を受けていた。

神野1号石棺は、安山岩の板石を長軸1.3m短軸0.65mの範囲に樹立する箱形石棺である。側壁は部分的に二重の板石を樹立し、墓壙内に裏込めの安山岩角礫を充填する。床面は安山岩の角礫の上位に砂岩円礫を敷設するもので棺内北東隅に須恵器短頭壺、中央西側の側壁際に鉄製刀子を副葬していた。須恵器短頭壺の形態から6世紀後半から7世紀前半の構築時期が推定できる。

神野2号石棺は、長軸1m短軸0.5mの範囲に砂岩礫が据え付けられ、その上位には部分的に砂岩円礫の敷設をみる。神野1号石棺の状況から推測して、側壁と小口の板石が失われ、床面の

み残存した状態にあったと考えられる。時期決定可能な出土遺物はみられないが、神野1号石棺と同様に6世紀後半から7世紀前半に帰属するものと考えておく。

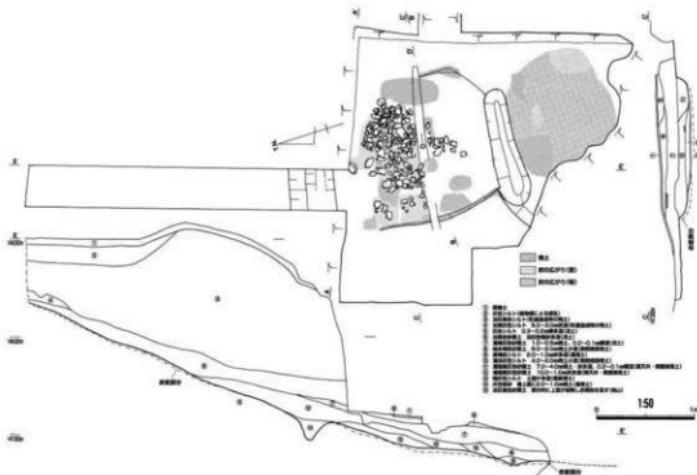
神野3号石棺は、墓壙と考えられる方形掘り方内に4石の砂岩がL字状に据え付けられた状態で検出した。神野1・2号石棺と同様に、箱形石棺の床面下位を構成する石材が部分的に遺存したものと推定できるが確定的ではない。周辺の遺構検出状況から、箱形石棺を考えておきたい。

4. 神野1号窯

神野1号窯は満濃池北岸の池岸に位置する須恵器窯である。現在の満水位よりも上位の池岸斜面において、焼土・炭化物層が露出しているのが確認され、緊急的な発掘調査が実施された。また、本窯は確認当初、「満濃池東岸窯」と呼称されていたものである(松本・岩橋 1983)。調査では、前庭部から燃焼部にかけての床面及び若干の側壁の立ち上がりを平面的に検出し、斜面上位に向かって設定したトレーニによって、燃焼部奥から焼成部にかけての床面を確認した。焼成部の床面傾斜は約23°を測り、周辺の現地形から判断して地下式窯の構造をもつと推定されるが、全長に関しては不明とせざるを得ない。

出土遺物は前庭部から燃焼部にかけての床面上にまとまって検出されている【第9図】。蓋に扁平な摘みをもち笠形の天井部をもつものが多くみられることや、杯の高台及び底部形態などからみて、8世紀前葉に帰属するもので占められており、本窯の操業時期を示すものと考えられる。

本窯の操業時期は、想定される満濃池の築造時期に重複すると考えられるが、古代の堤体高が現在よりも低いと考えられるため、池敷内に存在していたとしても、水面下へ埋没していたとは



第9図 神野1号窯跡断面図・完掘状況平面図

推定し難い。本窯の操業を満濃池築造と関連づけて考えるならば、築造事業の監理を担う官衙施設の出先機関が設けられ、そこへの食器供給を想定すべきである。(信里芳紀)

参考文献

満濃町 1975 『満濃町史』

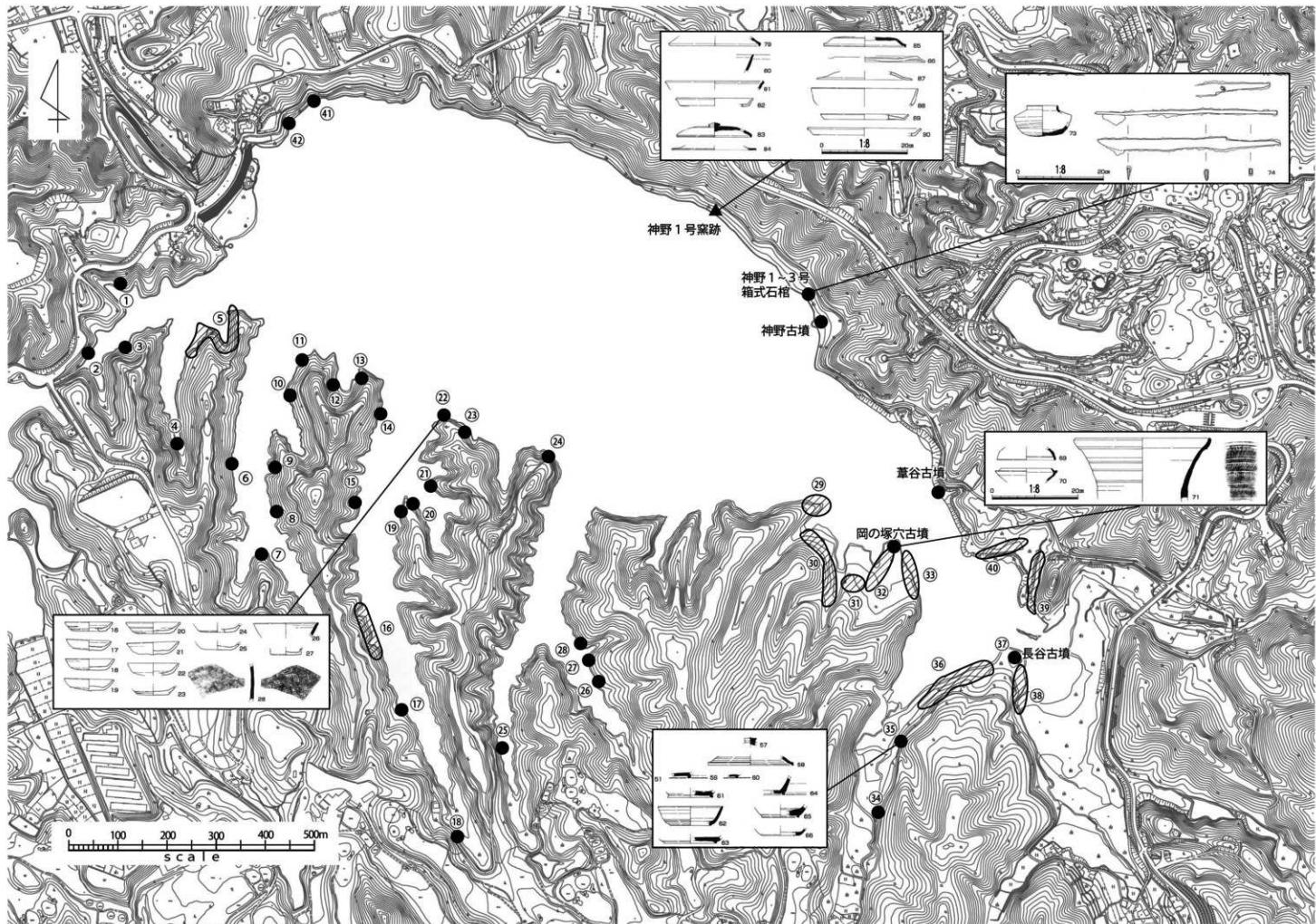
満濃町 2005 『新修満濃町史』

松本敏三・岩橋孝 1983 『香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ』『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第2号』瀬戸内海歴史民俗資料館

まんのう町教育委員会 2008 『満濃池総合調査報告書』

表掲地点	遺物 内容	時 期
①	土師器小片	中世
②	土師器坏・土師質土鍋	中世
③	須恵器壺・甕	古代(8~9世紀)
④	須恵器壺	古代
⑤	須恵器壺・甕・土師質土器片	古代(8~9世紀)
⑥	弥生土器壺底部・須恵器甕	弥生時代、古代
⑦	須恵器縁甕・土師器坏	古代、中世
⑧	サヌカイト片・須恵器縁甕・甕・土師質土器片	弥生時代、古代
⑨	須恵器甕・把手	古代(9世紀)
⑩	サヌカイト	弥生時代
⑪	サヌカイト片	弥生時代
⑫	弥生土器甕	弥生時代(中期末)
⑬	弥生土器甕・石包丁(サヌカイト製)・サヌカイト片・土師器碗・坏	弥生時代(中期末)、中世(13世紀)
⑭	サヌカイト片	弥生時代
⑮	弥生土器片・土師器坏	弥生時代、中世
⑯	須恵器片	古墳時代
⑰	土師器片	中世
⑱	サヌカイト片	弥生時代
⑲	弥生土器甕・サヌカイト片・須恵器	弥生時代(後期)、古代
⑳	サヌカイト片	弥生時代
㉑	須恵器片・土師器坏	古代(10世紀後半~11世紀前半)
㉒	サヌカイト片・須恵器甕片・土師器片	弥生時代、古代、中世
㉓	須恵器片・土師器坏・土師質土釜	古墳時代、中世(13世紀後半~14世紀前半)
㉔	弥生土器片・サヌカイト片	弥生時代
㉕	須恵器甕片	古代
㉖	弥生土器甕片	弥生時代
㉗	須恵器片	古代
㉘	弥生土器甕・石製品(石包丁・石斧・筋縫車)・須恵器・土師器・空巣	弥生時代(中期末)、古代、中世
㉙	弥生土器甕・甕・高坏・サヌカイト片・須恵器片・土師器片・土師器小皿	弥生時代(中期末)、古墳時代、古代(8世紀末~9世紀前半)、中世
㉚	サヌカイト片・須恵器・土師質土釜	弥生時代、古代、中世(14世紀~15世紀)
㉛	弥生土器片・甕・サヌカイト片・須恵器片・須恵器高台付き坏身・土師器片	弥生時代(中期末)、古代(8世紀)、中世
㉜	弥生土器片・甕・サヌカイト片・石罐・須恵器片・高台付き坏身・土師器片	弥生時代(中期末~後期初頭)、古代(8世紀末~9世紀前半)、中世
㉝	サヌカイト片	弥生時代
㉞	サヌカイト片・須恵器高台付き坏身・甕・甕・甕	弥生時代、古代(8世紀)
㉟	サヌカイト片・須恵器甕	弥生時代、古代(12世紀)
㉟	サヌカイト片・石斧・須恵器片	弥生時代、古代
㊂	弥生土器片・サヌカイト片・須恵器片・土師器片	弥生時代、古代、中世
㊃	弥生土器片・サヌカイト片・須恵器片・須恵器高台付坏身・土師器片	弥生時代、古代(7世紀末~8世紀初頭)、中世
㊄	弥生土器片・サヌカイト片・須恵器片	弥生時代、古墳時代、古代(8世紀)
㊅	サヌカイト片・須恵器片	弥生時代、古代
㊆	土師器	中世

第2表 満濃池内採集遺物一覧表



※遺物番号はまんのう町教育委員会2008『満濃池総合調査報告書』と共に通

第10図 満濃池内遺物採集・遺跡位置図